

## 被害者擁護者を選ぶためのガイドライン

被害者、非被害者はともによい被害者擁護者になることができる。被害者は次のように言えることで独特の癒しの要素を持っている、「あなたが経験なさっていることのいくらかは分かります」。しかし、犯罪被害者を助けたい、正義を追求したいという望みのために自分の仕事に打ち込んできたボランティアや専門家も同様に、あるいはもっと、有能であることができる。

以下のガイドラインは、ある人が被害者擁護者の経験に対して準備ができていないか、また、その人にとって環境が適切かどうかを決定するのに役立つだろう。被害者を擁護者として保持するか、あるいは擁護者として受け入れないかという決断は、インタビュアーの洞察力と感受性に大きくかかっている。

1. その人の擁護者になりたいという動機付けを確認しよう。次の質問をすること：

「なぜあなたは被害者擁護者になりたいのですか？」

「このときになって何があなたにこう希望するよう促したのですか？」

「あなたは自分の経験から何を得ようと希望していますか？」

擁護者となりうる人が被害者なら、彼らの個人的被害化をあなたと共有するように求める。あなたは、それがまだ彼らにとって抗しがたい問題であるかどうかを、感知することができるでしょう。被害化からの完全な回復は、たとえあったとしても稀である。これを期待すべきではない。ただし、被害者は、サービスを必要としている新たな被害者に対して全ての注意を向けることができなければならない。

その人が、新たな被害者と自分の被害化を話すことで追いつめられた気持ちになりはしないような方法で、これまで自分の被害化を扱ってきたことを示すような徴を探そう。悲しみ、不安、怒り、または敵意の極端な表示は、新たな被害者を非常に居心地の悪い気分させる。

2. その人が自分の擁護者としての役割を、被害者を支援するためというよりは、自分が良い気持ちになるために使う傾向があるかどうかを裁定する。

この分野での新しいフレーズは「共依存のケア提供者(co-dependent care-giver)」である。「共依存」という用語は、もともと嗜癖の分野で作られたものである。この用語は、他者のアルコールまたは薬物の濫用を、覆い隠したり守ったりするための不健康なライフスタイルを発展させてきた人を指す言葉である。

同じ様に、「共依存のケア提供者」は、常に他者のニーズを自分自身のそれよりも先に置きな

がら、最終的には関わっている被害者の損害にするのと同様、自分自身の損害にもしてしまう人を指す。

Center for Loss and Life Transition の長である Alan Wolfelt は、ケア・テイカー(caretaker)の共依存に関して次のような症状を挙げている：

- 「共依存」の無自覚と、それについて学びたがらないこと。
- 承認欲求と、与えるときにだけ安心を感じる傾向。
- 他者が自分自身で問題を解決出来るようになる状況を作るよりも、その人の問題を「解決して」あげたいという欲求。
- 過剰拡張および過剰コミットメントの傾向。「否」と言うことへの罪悪感。
- その人自身の支援や理解に対するニーズを否定すること。「素晴らしい世話人」と見られることを喜ぶ。
- 一日 24 時間いつでも呼び出しに応じられるように待機することと、ポケベルを持つことに対する純粋な親和性。
- 「困っている被害者」を助けることを優先して、自分自身の親しい人間関係をおろそかにすること。

上記の全ては、支配することへの強い欲求と解釈できる。彼らは人に、物事がどうなっているのかを語ることを好み、次のような態度をその徴候として持っている。「私はあなたが必要とするものを全部持っています。私にただあなたの世話をさせて下さい。」

### 3. その人がどの程度まで「御者」の行動にのめり込んでいるかを裁定する。

我々はみな一度ならず御者の行動に挑戦する。しかし、一貫して御者の行動にある人は、低い自尊心を持ち、自己価値に関して真の問題を持つ傾向がある。インタビューアとして、5つの動機に注意することが重要である。

- がんばれ——「私は他者ががんばってもらい、私がうまくやり遂げるにはがんばることだ、と感じて欲しい。私はしばしば質問に直接答えないし、しばしば質問を繰り返すけど、私は本当にそれを「やり遂げた」ことなんてない」このタイプの人、自分の仕事に満足することがなく、容易に落ち込んでしまう。
- 完全であれ——「私は自分にも他者にも完全を期待します。私は良い印象を与えたい。全ての基本をおさえ、人が自分のことをちゃんと理解しているかどうか確信したい。」このような人は、被害者が回復への巡礼の途中や刑事裁判システムの中で不完全性に直面するとき、被害者の欲求不満を高めてしまう。

- 私を喜ばせて——「私は他者に私を喜ばせ、幸せにして欲しい。私には他者の承認が必要です。私は他者が何を欲しているのか見当がつくので、その人を喜ばせることができます。」この人は被害者にとって主張的な擁護者にはなれない。自分が嫌われることに我慢ができないからである。
- 強くあれ——「私は自分の感情を見せません。私は単調に話し、無表情な顔を保つ傾向があります。この人は、被害者の痛みと結びつくことができないであろう。
- 急げ——「十分な時間がありません。私はいつも急いでいて、時間を気にしていません。私は早口で話し、素早く動きます。」この人は我慢強く共感的な聞き手になれないであろう—これは、有能な擁護者であるための肝要な性質なのであるが。

インタビューされる者が御者の行動に極端にのめり込んでいる場合、かつ/あるいは、あなたが他の問題の徴候に気づいたときは、被害者擁護者の職を提供するのを控えること。被害者にはもっと良い人を当てなければならない。他方、インタビューを受ける被害者がいくつかの御者の行動以外については良好なようであれば、他のボランティアの職を提供し、これらの行動を、彼らが自分の不適切な態度または行動を理解し、かつ乗り越えることを援助する基礎にすること。

#### 4. 現在の暮らし向きに対するその個人の見解を評価しよう。

- 私は大丈夫。あなたも大丈夫——「私の被害化は恐ろしい経験だった。しかし、私はそこから多くを学び、私の学んだことをあなたと共有したい」
- 私は大丈夫。あなたは大丈夫ではない——「私は辛い経験を乗り切った。しかし、私の被害者擁護者は恐ろしい人で、判事は本当に世間知らずで、検察は法律学校を出たはずがなく、被害者の権利運動はみんな腐っている、というのも、内部に私のような人間が十分にいないから。」
- あなたは大丈夫、私は大丈夫ではない——「私はあまり良くなって、たくさんのことで失敗してきたのが分かっている。でも、私は自分のできるなかで最善を尽くしたい。そして、これが私の成功しそうなもののうちの1つなのです。」
- 私たちはどちらも大丈夫ではない——「私はあまり才能がないし、ベビーシッターをたのんでここまでやって来るにも問題がある。でも、あなたのグループは、していないこ

とがたくさんあるし、あなたが手に入るどんな援助も必要としていることを知っています。」

「私は大丈夫、あなたも大丈夫」が動機である人だけが、有能な擁護者になるであろう。

5. 対象者の人生の期待を探してみよう。擁護者は未来から何を期待しているだろう？  
期待は肯定的であるべきだ。否定的な期待を持つ潜在的な擁護者は、繰り返し嫌な気分、落胆、マイナスの結果に終わるような活動に従事することになるだろう。

#### 6. 潜在的な問題を探そう

この最後の要因は、該当者が情動的、または身体的に障害のある場合に役立つような広範なカテゴリーである。あなたは多くの分野を探索する必要がある。

- 彼らの人生において誰が重要人物であるかを知る。
- 彼らがどう考えているかどうかを見出すよう試みる。彼らは論理的か？
- 彼らは言葉をどの様に使っているか？ 彼らは状況を誤って解釈しているか？
- その人には大きな気分変動が見られるか？
- 不安の徴候を探す。
- 健康に関連して心を奪われているもの（専心、Preoccupation）を探す。
- 薬物濫用やアルコール中毒の徴候、反抗性や反社会的行動を探す。